

# 国語教室

さざなみ国語教室

第523号 2025年10月25日

発行者代表 吉永幸司

連絡先 大津市柳川2-11-5

TEL 077-522-1008

発行所 滋賀児童文化協会

NPO 現代の教育問題研究所

## ジョンと母の愛

中野 千秋

吉永幸司先生は、小学校教諭に

なられて四年目に初めてクラス担任をされた。私はその生徒の一人として五年生と六年生の2年間お世話になった。吉永先生は国語の授業の中で詩を書く課題を出された。授業中に書いたのか宿題だったのかも覚えていないのだが、自分で書いた詩の内容は良く覚えて

ジョン

僕の家では犬を飼っている  
名前はジョン

ジョンは他の犬を見ると  
すぐに吠える

ジョン

そんなええ格好  
せんでもいいのに

吉永先生はこの詩を大層褒めてくださり、教室の後ろの掲示板上に貼り出してくださいました。先生に褒めてもらえたのはとても嬉しかったです。あれから六十年余り経った今でも自分の詩を丸々覚えていて、今だから余程嬉しかったのだろう。ジョンは私が小学校三年生の時に、母親がクリスマスプレゼントだと知人からもらって来てくれた子犬だった。動物好きの私は大喜びしてジョンを可愛がり、ジョンも私にとっても懐いてくれた。間違いない、生涯で一番嬉しいクリスマスプレゼントだった。

先日、久しぶりに教え子のTさんとランチを共にした。彼女は数年前に離婚し、小学生の息子さんとの二人暮らし。あれこれ他愛もない話をする中で、彼女は「今度家で猫を飼おうと思っているんです。息子が寂しい思いをしないように、私の方にばかり気を向かわせることがないように」と言う。私はTさんが良い母親になったなあとはほっこりした気分になった。

ランチを終えた帰り、一人で車のハンドルを握りながらハッと気づいた。母がジョンを連れて来てくれたのは、両親が離婚し、父親が居なくなっただけでなく、母の気持ちも教える子に気づかせてもらったのである。

母が亡くなって十数年。もうすぐ古稀を迎えようとする今頃になって母の愛に気づくとは、何と愚かなことであろうか。  
今さらながらだけど、かあちゃん、ありがとう。

(日本国際学園大学教授・

麗澤大学名誉教授)

さざなみ

▼いつの時代も主語を「子供が」とおき授業改善がすすめられてきた。最近では、一時間の授業を「課題の設定」個人での学び、ペアやグループでの交流、全体での共有、学びのまとめ」という形で進める授業形態が広がっている。これは、一人ひとりの考えを引き出し、互いの思考を交流させることで学びを深めることを意図している。「一斉学習指導」と比べると、指導の仕方や学びの主導権や子どもの関わり方に大きな違いがある▼この授業形態では、個人の考えと集団の学びの両方がうまく組み込まれている。「協働的な学び」として仲間とのやり取りを通して理解を深めることを重視している。教師がすべてを直接教えるのではなく、子ども同士がやり取りが学びをつくる場面が多いのが特徴である▼一方、一斉学習指導には、知識や技能を効率よく身につけられるという強みがある。教師が課題を提示し、説明や板書で知識や技能を系統立てて教える。子どもたちはそれを聞き、理解し、練習する。全員が同じ内容・同じ進度で学ぶため、学習内容の保障や指導の効率は高い▼両者には一長一短がある。一斉学習で身につく体系的・効率的な力と、協働的な学びで育つ主体性や対話の力。その両方を、学習内容や子どもの姿に合わせて組み合わせていくことが大切なのだろう。主語の「子供が」に続く述語をどう描くか、そこに授業づくりの真価が試される。

(吉永幸司)

一言  
弓削裕之

『ちいちゃんのかげおくり』（光村三下）の範読後、クラスはため息が漏れるような雰囲気だった。すぐに初読後の感想を書いた。書き終わった子は、今の自分の気持ちや作品を表す一言を、ロイロノートに書いて共有した。

A ちいちゃんがいそご空にきえていきました。とても悲しい話でした。ちいちゃんにはまだ人生がたくさんあったのに空へいってしまいました。

Aさんは感想を書いた次の日、朝休みが始まるまで教室で『ちいちゃんのかげおくり』を読んでいた。ロイロノートの一言には、「悲しい」と書いていた。

B 私は、かげおくりをしたことがあります。空にうつるのがふしぎだなあ、と思った時、お母さんがこの作品のお話をしてくれました。とても悲しいなと思いました。

C 私のお母さんも知っていて、私のお兄ちゃんもこの話を知っていて、私も今日、この話をちゃんと読んだ、と思いました。

教科書を通して長く読まれているからこそ、こういうやり取りも生まれる。Bさんは一言を考える時、「三つでもいいですか」と聞いてから、「がんばった」「かわいそう」「悲しい」と書いていた。

みんなの「一言」を見て、友だちに聞きたいことはないか尋ねた。「青空」と書いたDさんに、「どうして？」と質問があった。Dさんは、「読み終わって、ちいちゃんのはじめに家族とかげおくりをした青空を思い出したから」と答えていた。

「あー」というEさんの一言にも質問があった。「最後に家族に会えてよかったけど、ちいちゃんの命が消えてしまったから……」と、はつきりとした言葉にできない感じだった。

F 私は、『ちいちゃんのかげおくり』を読んで、今こうやって友だちと遊んだり学べたりするのはきせきなんだなあと思いました。

G 私は一人でタブレットで『ちいちゃんのかげおくり』を読んだ時は、せんそうってどんなにこわくて、きけんなんだろうとかびあがりませんでした。でも、三十一人で読むと「せんそう」というのがどんなにきけんでこわいかわかびあがりまりました。

教室でこの教材を読む意味について、改めて考えていきたい。

（京都女子大学附属小学校）

ゲーム理論  
レボリューション  
少徳 信

夏の合同研で、主張と事例の関係は母親にゲームを買ってもらったときの要望と根拠の関係と似ていることに気がついた児童について話した。このゲームの事例のように、自分の生活に根ざした理解の仕方は学級の子どもたちの間に広がり、「ゲーム理論」と呼ばれ、受け入れられるようになった。今回は、この「ゲーム理論」に進展が見られたので報告したい。

2学期に入り、本格的に運動会の練習の時期になってきた。本校では運動会の際、高学年の児童が応援団を組織するのだが、本児も仲良しの友だちと一緒に応援団に入ることを希望した。希望通り応援団に選ばれ、順調に練習をしていたのだが、毎日中休みも昼休みも応援練習をしているうちにドッジボールがしたい気持ちがわいてきた。もちろん今までの練習のときもドッジボールがしたい気持ちをもっていたのだが、赤団のみんなのために気持ちをこらえて練習に参加していた。ところがその週の金曜日の昼休みはめずらしく体育館で遊べる日で、本児はどうしても体育館でドッジボールがした

かった。どうかして応援練習の休みをもらうために、本児は2学期の初めに学習した「文章に説得力を持たせるには」の内容を生かして団長に自分の思いを伝えに行った。以下、本児が団長に伝えた言葉である。

「ちょっといいですか。僕は、今週の金曜日の昼休み、応援練習の休みが欲しいと思っています。どうしてかというと、その日は体育館でドッジボールができるからです。もちろん、団長の応援練習をしたいという気持ちもとても分かります。だから、金曜日までの練習を、誰よりも全力で取り組みます。だから、今週の金曜日、休みをください。」

この言葉を聞いた団長は、快く「ドッジボールに行つていいよ」と答えてくれた。その後本児に話してみようだったか尋ねてみると、「団長が思っていることを言えたのが良かったんだと思う。もし理由だけだったらあんな風に答えてはもらえなかったかもしれない。」と話してくれた。自分なりに相手の立場を想像して考えることの大切さに気付けたことが収穫であり、「ゲーム理論」がより発展したように感じたことだろう。まさしく「ゲーム理論レボリューション」だ。

（彦根市立高宮小学校）

導入にて  
畑中 翔太

私の学級にいるA児は、気分によつて学習に意欲がないだけでなく、授業中に別の本を読んだり寝てしまったりすることがある。そんな子が学習に向かうきっかけを垣間見ることができた。

9月の中旬から「ちいちゃんのかげおくり」の単元学習になり、A児の様子が気になりながらも楽しく読むことを模索していた私は、物語の第一場面を役割読みで読むことにした。

この場面は、登場人物のお父さん、お母さん、お兄ちゃん、ちいちゃんの四人でかけおくりをする場面であり、多くの台詞がある。まず誰がどの台詞を言っているのかを確かめ、班で役割を話し合つて決めて時間内で何度も読むことにした。

この役割読みが楽しかったようで、元気な声が学級に広がっていた。あのA児が翌日の授業で、「今日の音読も、役割読みがいい。」と訴えてくるほどだった。

2場面になった時、真似っこ読みをすることにした。教師の真似をして読む方法で、子ども達と一緒に読み、声の出し方や間の取り

方などをイメージさせるために取り組むことがある。A児にとつて気持ちのななかつたのか、なかなか音読に参加しなかった。

「Aさん、一緒に読みましょう。」と声をかけるが、机に突つ伏していた。その後の授業でも似たような様子が続く時間になってしまった。

四場面になった時、ちいちゃんが「かげおくり」をすることが書かれており、一場面と比較をするために、一場面を役割読みで振り返ることにした。やはりA児にとつて、この活動が必要だったらしい。

「ぼくは、お父さんの役がやりた

い。」など活発に班の人と関わったり、大きな声で文を読んだり活動していた。それだけではなく、その後の文章を読み取る話し合いでも、見つけた言葉や自分の意見を発表することができた。

これらのA児の様子から、導入の重要性が感じられた。展開の充実の前に子ども達をどのように授業というステージに上げるのかを考えなければならぬ。今回の気づきとして、「子どもにとつて楽しいこと」と「班など小集団での比較的自由(教師の干渉がない)活動」にあったのではないかと考察している。

(大津市立田上小学校)

こんぎつねの授業  
から考える  
川端 由起

さざなみ会での研究「国語教育書を読む」の実践において、私が読んだ紅野謙介著「どうする? どうなる? これからの国語教育」と並行して読んだ本があります。本は、「ルポ誰が国語力を殺すのか」です。この本の感想は、以前にも記述しました。この本によれば、筆者石井光太氏がある学校の研究授業に参加しました。こんぎつねの授業です。こんぎつね第二場面「大きなねの中では、何かぐずぐず煮えていました。」の箇所、教員が「にえているものは何でしょう?」と尋ねると、ある児童が「女たちは、兵十のおつかあを煮ています。」と真顔で発言し、石井氏が驚愕したそうです。

5年ぶりに4年生の担任になって、こんぎつねの授業が出来るのを楽しみにしていました。この「おつかあを煮ている」という発言を本場に児童はするのか試したく、第二の場面で、まず音読を行つてから「にえているのは何でしょう。」という問いかけをし、ノートに書かせました。一人目はうなづきを煮ていると書いていました。理由を聞くと、「おつかあが死ん

だから欲しかったうなぎを皆で煮て、なぐさめるため。」だそうです。まだ意味がわかりません。2人目、「おつかあを煮ている」と書いた児童がいました。私は驚愕し、「おつかあを煮ている」と書いた人他にいますか」と聞くと、3人ほど手が挙がりました。

石井さんが体験した驚愕な出来事が私の身にもふりかかっていたのです。「何故おつかあを煮ていると思ったのか。」と尋ねると、「おつかあは死んだから、煮て処理をしないとイケないと思ったから。」と真顔で答えるのです。まだ10歳にも満たない児童が、日本では人が亡くなつたら通常は火葬をするという事実を知らないかもしれないが、常識で考えても人を鍋なんかで煮ないと何故わからないのでしょうか。また、第二場面で、ごんの「ああ、そうしきだ。」兵十のうちのだれが死んだんだろう。」という言葉があつたから、そう考えたという意見もできました。

このおつかあを煮ている発言には、読書離れとマルチメディアへの過大な傾倒があると思います。また、読書経験が少ないので、物語を部分読みしか出来ず、全体像を捉えられないのではないかと思いました。新美南吉さんの他の本を児童に読ませ、全体から登場人物の気持ちの変化を考えさせたいです。

(草津市立志津小学校)

# 学校司書との連携による 学校生活・学びの充実 箕浦 健司

本校の学習活動の充実に欠かせない力強い味方がいる。学校司書である。

学校司書による充実した学校図書館の経営が行われ、子どもたちの読書活動および各教科等の学習活動の充実につながっている。

年度当初には、学校司書によるアンケートが全教員に対して実施された。内容は、子どもの頃に読んで心に残った本、その理由、その本にまつわるエピソード等について。もちろん私も回答した。数日後、学校図書館へ赴くと、全教員の回答内容がそれぞれポスターにまとめられ、掲示されていた。そして、教員各々の愛読書も並べられていた。私も思わず見入った。自分のポスターを一番に確認したが、各先生方の愛読書やそれにまつわるエピソードを読むのもおもしろかった。それは本校の子どもたちにとっても同じであった。子どもたちはポスターの前に群がり、興味津々の様子。先生方の愛読書を手にとって読んだり、ポスターに書かれた内容を確認したりしていた。自分の担任の先生の愛読書を読む。校長先生の愛読書についての説明を読む。この掲示をきっかけに、教員と子ども

ちの本や読書に関わる会話が生まれる。そして何より、「おもしろそう。私も一度読んでみよう。」と、子どもたちの本との出会いの機会となっていた。

この取組は一学期のものだったが、季節が変わり、その都度学校図書館の模様替えは行われている。二学期となったある日、学校図書館を訪れたある児童が、「あれ、先生のお気に入り本の紹介が、なくなっている」とつぶやいていた。よほど心に残ったのだろう。また、別の児童は、「教頭先生、私も『ずっとけ三人組』シリーズ、好きです!」と、廊下で話しかけてくれた。掲示の工夫一つで、子どもの読書生活に大きな影響があった。環境の大切さ、重要さに改めて気付かされた。

現在は、運動会前ということであスリートの自伝や、運動会をテーマにした物語、スポーツについての本が並ぶ。もしかしたら、今ご紹介されている本を読んだことがきっかけとなり、運動会への意欲が高まる子がいるかもしれない。また、学校司書作成のポップを参考に、国語科のポップ作りが充実するかもしれない。期待は膨らむ。

もう一つ。各教科の単元や授業づくりへの関わりについても紹介したい。夏季休業中に、3年生の担任と司書が打合せをしていた。内容は、二学期に学習する「ちいちゃんのかげおくり」で、並行読

書を行う図書の内容や、並行読書の在り方について。入念な打合せが行われた数日後、内容充実のリストが作成されていた。これらの図書については、単に子どもたちに紹介して「読みましょう」と投げかけるだけではなく、単元の導入時に「味見読書」が司書中心に行われる予定である。押しつけや強制、子どもたちの負担にならないような配慮のもと、確実に子どもたちが本に触れ、興味をもてるような機会が保障される。また、一学期には5年生がフローティングスクールに参加したのだが、児童学習航海の事前・事後に総合的な学習の調べ学習で活用する環境に関わる本、琵琶湖に関わる本の準備を担当が司書に依頼。子どもたちは豊富な資料を基に事前学習を行って航海に臨み、事後は「うみのこ」での2日間の経験と関連させながら事後学習を行い、学びを深めることができた。司書の存在は、教員にとって大変心強く、また非常に頼もしい存在となっている。

本校には、学校司書と連携し、子どもたちの学びを読書で、本で充実させようという雰囲気がある。それを前提に単元を、授業をつくるという仕組みができあがっている。今年度より本校に赴任し、うれしく感じた多くの出来事の一つである。

(長浜市立速水小学校)

## 編集後記

▼九月例会  
(第五二二回)

田定子さん(湖東第一小学校)の研究主題は「『書くこと好き』という教室をめざして」。提案内容は「一年生の四月から九月までの『書くこと』の実践。指導は次の通り▼『読むこと』では、視写や書き話、簡単な説明文を書くなど、書く機会を増やしている。書くことでは、かなり書き慣れてきたようでした。時間内に書けるようになってきた。いろいろな文章を書くことで、書くことへの抵抗をなくしてほしいと願っている」(提案文より引用)▼取り組みは「読むことでは、音読・視写・言葉見つけ・文字の指導・書きを書く・簡単な説明文を書くこと。書くことでは、書く単元の文を音読し視写、いろいろなテーマで書く、『せんせいあいのね』の活動を行っている。これらは、国語科のどの時間でも取り組める大事なことである▼事例(目標)「野菜を見て、イメージをふくらませて、見たことや感じたことを書くことが出来る」授業の進め方は①にんじんやきゅうりなどの野菜を見て、思ったことを感じたことを発表する②(①をもとにして)野菜のイメージをふくらませる③「せんせい、あのね」と話しかけるように書く(困っている子には、野菜を見て思ったことを話させ、書き方を示してやる)④友だちの話を聞き、自分の話と比べる(※いいなと思うところ、まねしてみたいところを見つけさせる)⑤書きあがったらお互いに読み合い、交流する(※よいところを見つけさせる)というものであった。感謝。▼巻頭には、中野秋先生から玉稿を頂きました。深謝。

(吉永幸司)